

読売俳壇

高野ムツ才選

田の神を招く奥能登波の花

国分寺市 野々村澄夫

【評】「あえのこと」は田の神を自宅でもてなす奥能登の農耕行事。正月が終わると豊作を願って送り出す。その頃、海岸に寄せる波の花も豊年を予祝するかのようだ。

ならぬことはならぬ城下や雪囲

福島市 木村 隆茂

【評】「ならぬことはならぬ」は会津藩の子供たちが学んだ「仕の掟」の締め言葉。雪深い風土が育んだ人間育成の教えが現代にも生きる。避難所の静けさ戻り蒲田干す

相模原市 はやし 央

【評】地震だろうが。避難していた人達もどこにか家に戻ることができた。ほっと安心すると同時に、その行く末を心配しながら蒲田を干す。平和とは何かと自問レノンの忌

東京都 石川 昇

噓してマトリョーシカと目の合へり
加古川市 石村 まい
戯れあつてやがては眠る湯婆かな
奈良市 熊崎 彰

山茶花や咲き尽くしてもまだ咲くや

千葉市 大和姫

さあ行くぞ大きく吐きて息白し

横浜市 窪田 遊水

革ジャンにガソリン匂ふ冬日かな

茅ヶ崎市 原田 博之

その悪事じつと聞きいるかじけ猫

越谷市 中村 利明

正木ゆう子選

ややこしきよはひとなりぬゆきをんな

名取市 里村 直

【評】架空の雪女なのに、なぜかとてもリアルなのは、「ややこしい年齢」が誰にとってもリアルだからだろう。そんな年齢が自分にもあったと思ひ当たり、微笑ましい気持ち。

こんな夜に話してみたき雪女

福岡市 山本 真弓

【評】伝承の雪女といえは、相手は男性であることが多く、恐ろしい妖怪だが、こちらは女としての雪女。こんな夜とは、どんな夜だろう。

「おかあげ」てふ料理用語やプロックリ

堺市 高田 敬子

【評】茹でたあと水に晒さず、すぐ炭に上げるのがおかあげ。蒔蘿草や絹莢は水に晒すが、水っぽくなりやすいプロックリは、必ずおかあげ。龍のすみ深山の湖に雪ささる

新潟県 冬木 陽介

紙も絹も美濃は美し飛騨寒し
横浜市 小野寺 洋
根に十字後は手で割く大白菜
武蔵野市 大谷由美子

降る雪や戦記は昭和ひき寄せ

鳥取県 表 いさお

火吹竹この煥朝までつなごうぞ

尾張旭市 小野 薫

誰にでも秘密はありて北きつね

東京都 本多 明子

俳壇歌壇写して真似て湯さめせり

小平市 上沼 節子

小澤 實選

雑煮いくつ母にこたへぬ餅五つ

津市 中山 道春

【評】母は「雑煮に餅いくつ入れますか」という気持でこう聞いてくれた。それがわかった上で「餅五つ」と答えた。なつかしいやりとりのうちに新年の気分が感じられる。しみじみと老いたる手なり爪切れる

爪を切っている際に、自分の手に老いを感じたというのだ。老いの実感が即物的に伝わってくる。爪切るという動作も自然である。

東京都 斎木百合子

【評】かじかんで手指の自由が効かず、思わず力が入ってしまった、鉛筆の芯を折ってしまった。室内の景だろう。昔は室内も寒かった。芋煮会こんなにやく千切るだけの役

東京都 望月 清彦

風花のくらがり峠越えて来し
武蔵野市 相坂 康
深く吸ひ細く吐く息月始
奈良市 上田 秋霜

寒椿落花に朝の日は足らず

北本市 萩原 行博

電源は電気鰻といふ聖樹
川崎市 沼田 広美
硝子戸を結露はしりぬ薬喰
大阪府 池田 寿夫

風呂嫌ふ大洗はれて冬深し

町田市 谷川 治

近江八幡市 塚本 尚子

津川絵理子選

子どもには壊す喜び霜柱

横浜市 鈴木 基之

【評】大人でも霜柱を踏むのは楽しい。子どもはなおさらだろう。霜柱に限らず、子どもは何でも壊す。壊してこの世界を確かめているかのよう。そこに喜びがあるという発見。出番待つ手品師の掌の懐炉かな

栃木県 あらみひとし

【評】手が滑らかに動くように温めているのだろう。夢の世界を作り出す手品師は、舞台袖では地味。意外な一面が垣間見えて面白い。遠くから見つけてもらふ冬帽子

大阪府 今井 文雄

【評】目立つ色の毛糸帽かもしれない。遠くからでも一目でその人と分かるくらいに。見つけてもらえる冬帽子、とは発想がユニークだ。靴の無き幾万の足冬の暮

松江市 三方 元

空つ風煮込みうどんなで育ちけり
狭山市 小俣 敦美
筆ペンの黒迫り来る年賀状
我孫子市 安倍 芳彦

想ひ出は忘れるために落葉掃く

青森市 小山内豊彦

月冴ゆる忠霊塔にカッパ酒

高知市 加田 紗智

青春は寒し帝都の四畳半

浜松市 久野 茂樹

冬木立考えるひと立ち上がれ

京都市 滝村 実

牛がゐて犬がよろこぶげんげ畑
神戸市 吉野 勝子
【評】「夢もまた命の一部山眠る藤嶋務」裏山の雪庇気づかふ夜の電話 徳橋よし子」も最後まで残したが、暗さを増す世界には、もっと光をと思ひ、最後の選でもあるし、吉野さんの句を上げた。明るい犬は喜びを尻尾で表すが、牛はいつも平然としているように見える。そこが面白く、光がふんだんに満ちている。
(矢島清男)

年間賞 俳句 ①

戦没後八十年目の余寒かな

川口市 高橋まさお

【評】身内のどなたかが戦没して八十年目のことだろうが、作者がその犠牲者に成り代わって句を詠んでいることも解することが出来る。あと一年終戦が早かったなら生還できたかもしれない。その悲しみが春彼岸の頃の寒さとなって毎年蘇る。戦後八十年目の思い。「被爆樹に被爆の記憶原爆忌 神宮齊之」も同様。
(高野ムツ才)

は

